

本物の理科

先日、教育関係紙を読んでいたら、こんな記事があった。

『「理科好き」を生まない日本の教育』

国立青少年教育振興機構の高校生の科学意識調査結果である。

主体的な学習を行う代表的な方法として「自由研究」をあげ、日本は中国、韓国、米国よりもそれを経験した生徒は多い。

しかし、自然への興味関心や理科に関して興味あることを自ら調べたいかの問いでは4カ国中最低である。

なぜか？

その違いは、自由研究をいつ行っているかであると分析している。

日本は、小学校でダントツに多いが、中高へ行くと最低になる。しかし、3カ国は、むしろ中高へ進むに従い、多くなる。

さて、我が国に戻ろう。

この手の議論に対する結果は、ここに書かなくてもわかるだろう。

多くが、3カ国の取り組みに肯定的な考えを持つが、その原因や対策を論じても、受験体制をはじめ、その国の取り組みの違いにたどりつくことが多く、現実には思うように進んでいない。

学習指導要領や教育行政の長は、現実はともかく、探究的な学習の充実等を論じ、否を受けないように述べている。

さあ、どうするか。

私は、現場の先生に係ってくると思う。

要は、年間105時間から140時間の限られた資源をどのように活用するかである。

カリキュラムマネジメントをしっかりと行うことができる普通の理科教員をいかに養成するかである。

各中高生が1年間に数時間探究的な活動（ここでは課題研究や自由実験に近い形態をいう）を数年間経験することは、表面的な狭義の学力向上（点数上昇）には現れないかもしれないが、心身のどこかに経験値として残り、一生の中で知らないうちに生きてくると考えている。

このホームページにも、課題研究の記事を載せてあるが、自然なかたちで、中高理科教員が探究的な学びを実施してもらえることを願っている。